

野球部 甲子園初戦・波佐見戦突破

村中監督が 初戦9回裏と今後の目標を語る



8月7日に行われた甲子園1回戦(波佐見戦)に本校野球部が勝利した。監督の村中隆之先生は1回戦の感想と8月14日に行われる予定の次の試合(2回戦・青森山田戦)に向けての意気込みを語られた。



▲村中先生は熱心に野球部について語られた。



速報新聞

キマグレ

発行所
彦根東高等学校

新聞部

彦根市金亀町4番7号

「9回裏は答えてほしい」「1・2塁の東高の形」

初戦を終えて

●甲子園初戦を終えての感想

— 甲子園出場は春・夏合わせて5回目で今回はどうしても勝ちたいという思いが強かった。甲子園で一勝という目標を達成できてよかった。OBたちもとても喜んでくれたし、生徒たちもよくやってくれた。スタンドの雰囲気も

よく、応援がグラウンドの選手たちにも届き、奮い立っていた。応援する人たちと選手が一体となった、開幕戦にふさわしい良い試合だったと思う。また甲子園で一つ勝つことのしんどさを物語る試合でもあった。一つミスをしたら負けてしまう、そんなギリギリの試合だった。

9回裏のベンチ

●9回裏の指示や、選手を送り出すときの心境

— 状況はシンプルで難しいことはなかった。まず増居がここまで打っていないなかったの代打を立てることは決めていた。また増居はここまでよく投げていたので、延長になれば誰かほかの人に投げさせようと思っていた。その代打には松井しかいないと思っていて、松井が出てくれるだけでチームが勢いづくし、やってくる男だと思っていた。良い当たりではなく詰まっていたが、松井は気力で外野に持っていた。そのヒットでベンチの雰囲気が変わった。松井のヒットの後、同点にするにはヒットが2本必要で、1本は原最也、そしてあともう1本だと思っていた。一、三塁で点を取るとき、1点の取り方の答えは出ている。ス

クイズかエンドランか…と色々あるが、今回は確率の高いエンドランを使った。1点はまず予定通りだった。そのあと高村のヒットは出ず、ヒットを出すのは結局岩本だった。野球は数学の問題を解くのと同じだ。序盤、数学の問題では「この公式を使うのかな。あれでいけるかな」などと考え、違ったら方向転換していくがそれは野球も同じだ。また終盤、野球で言えば8・9回には方向性が定まってきてもう答えが出ている。最後で間違えるとすれば、計算ミスのようなポカだけ。野球でもそれさえなければ大丈夫。9回裏では答えにどう向かうかしか考えておらず、意外と冷静だった。しかし実際にはもう一方で感情が昂ぶっていて、そういった冷静さと熱い思いが混在していた。

話題の頭脳プレー

●メディアなどで1塁をオーバースタイルしたバッターランナーを捕手が刺すプレーが頭脳プレーと話題になっているが？

— 色々なところで東高についてのおまじな話題が上がっていると思う。このプレーもいつも練習していて、春の大阪桐蔭戦でも一度使っている。相手が無警戒であれば使えるプレーなので、積極的に狙うわけではないが、次も使える

甲子園初勝利について

●甲子園初勝利の感想

— 4年前は初めての夏の甲子園だったので手探りの状態だったが、出場すること自体に価値があった。このチームでも甲子園に出られることは喜ばしいが、それだけ目標にするのは物足りない。そこで甲子園で一つ勝つというのを目標にしてきて、選手たちはプレッシャーはあったと思うが、それを乗り越えてやってくれた。全国で勝てるチーム

自分たちの野球を

青森山田の印象

●次戦の相手、青森山田高校の印象

— 正直わからない。以前は大阪など県外出身の選手が多かったが、今は他県の人が多い。森山田に行っている印象はななく、地元の子を中心にチーム作りを行っていると思う。だから派手なチームではなく堅

今後の練習

●次の試合に向けてどのような練習をしていくか

— 新しいことは特にはしない。バットを振る練習をしたので近くの練習場をお借りして、そこできっちり打ち込みたい。あとは連携プレー。

次の試合への意気込み

●次の試合に向けての意気込み

— 甲子園で一勝という目標は達成できた。滋賀の全国優

甲子園に出場するチームは連携プレーが破たんしてしまうと、そこを抜け目なく攻めてくるチームばかり。試合で連携プレーをしっかりとやるためにも、練習でキャッチボールなどをして確認していきたい。

勝はまだないのでこれを遠い目標とし、一戦一戦で自分たちのできることをしていきたい。次の目標は2回戦突破。